

第5号

愛鳥教育

1981
10月

〒150 東京都渋谷区南平台町8-20 (財) 日本鳥類保護連盟内 愛鳥教育研究会

夏季研修会を終了して

8月19、20日、本研究会初めての宿泊研修が東京都西部の御岳山で行われました。

日程上、田村会長が北海道へお出かけの折でご指導いただけず残念でしたが、夏の終り頃にかかわらず野鳥の出現も比較的によく、連盟の方々のご指導の下に充実した時を過ごすことができました。また自然保護のあり方や指導上の悩み等については、集まったメンバーが、まるで10年の知己のように談論風発、夜のふけるのも忘れて語り合い、泊を伴う研修のよさを痛感させられました。

19日午後の柳沢講師のお話では、自然の中でのさまざまなご経験から、非常に身近に、平易に意義深い内容をご指導いただき種々感銘いたしました。

朝の探鳥会では、20数種の野鳥にふれ、特にオオルリの姿や、ヤマドリのドドドドという羽音をきき、勇ましい姿勢を目撃したことなど印象的でした。今後もこのような機会を数多く持ち、会員自体が、大自然の中で充足感を味わうことが、会として、真の自然保護のあり方を追求する方途になるのではとしみじみ思いました。

今回の研究発表は、神奈川県秦野市立本町小学校と、東京都福生市立福生第五小学校にお引き受けいただきました。両校ともスライドで生々しい実践をご発表になり、愛鳥活動のあり方や、具体

常務理事 下田澄子

的な指導の手だてについてご教示下さいました。発表者の先生、ならびにご協力の両校の先生方に厚くお礼申し上げます。

5月総会当時は、このような会を地方に持ち回ったらという考え方もありましたが、準備期間その他で今回御岳山ということになりました。参加の方々から、何年か同じように会を持って充実していく方向のお話もありましたので、今後この辺のことについて検討したいと思います。特に地方会員の方々のご意見をお手紙などでおよせいただけましたらと思います。

ともあれこの夏季研修は、参加者にとって実り多く楽しかったというお声をたくさん聞き、幸せな気持ちになりましたが、これも日本鳥類保護連盟の方々のご援助があったればこそです。深く感謝申し上げます。

Today Birds, Tomorrow Men

日程 1981.8月19日～20日

講演「野鳥の見分け方」19日1時30分～4時30分

日本鳥類保護連盟 柳沢紀夫指導部長

発表「本校の愛鳥活動」20日9時～10時

神奈川県秦野市立本町小学校 栗田龍司先生

「地域の自然をみつめる愛鳥指導」10時～11時

東京都福生市福生第5小学校 栗原 仁先生

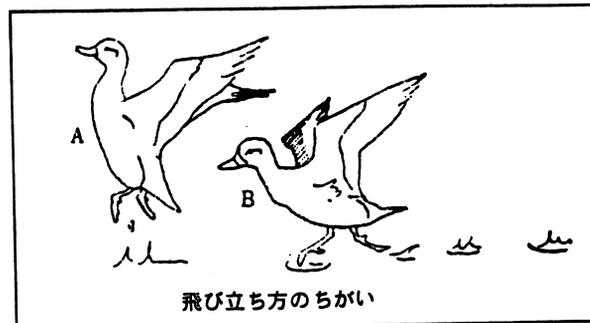
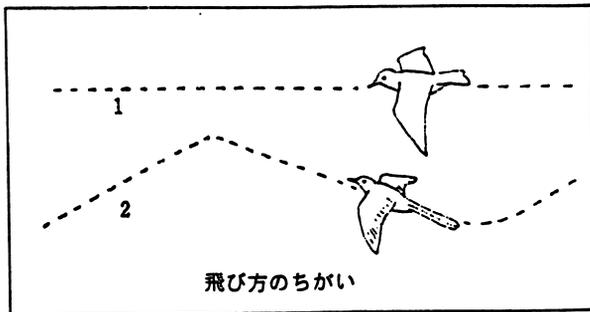
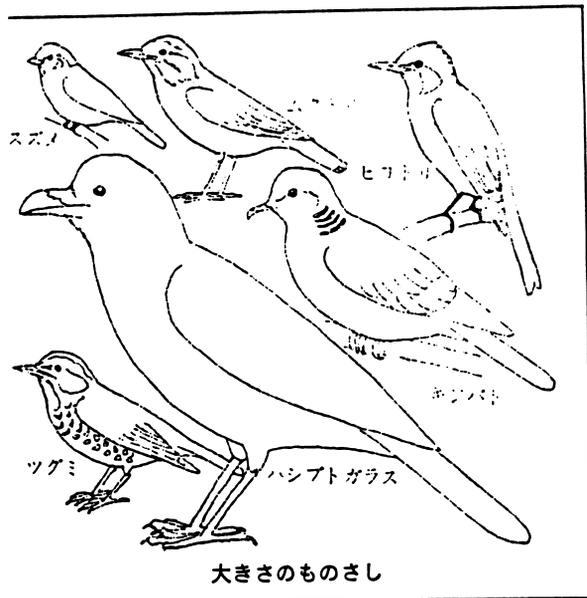
講演

野鳥の見分け方

日本鳥類保護連盟
指導部長・柳沢紀夫

まず 最初に鳥の体の各部の名前や基本的な言葉を理解しておきましょう。例えば 全長：一般的に鳥の大きさの表示の一つで、嘴の先から尾の先端までの長さを表わす、など図鑑で見ましょう。

野外で鳥を見る時に注意することには、大きさ姿勢、色彩、動作、鳴き声、環境などがあります。大きさ 図鑑では全長で表わす事が多いですが、野外では距離が遠いので実長を知るのは難しい。



そこで、身近に見られる鳥、スズメ、ムクドリ、ハト、カラスなどと比べて、それより大きい、小さいかで大きさを判断します。

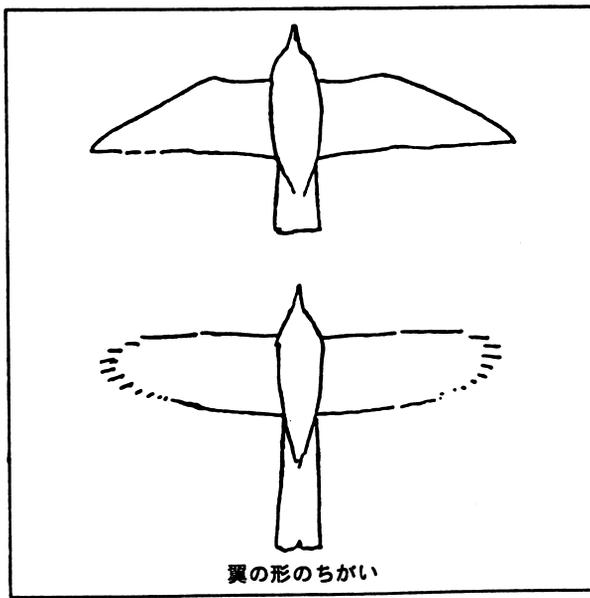
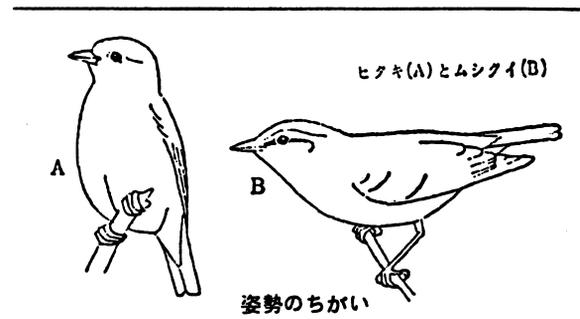
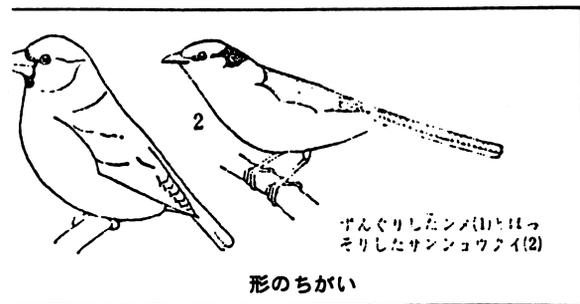
形と姿勢 その鳥の姿勢で大体の仲間分けができます。体が長い、太っているか(下図)。横長の形をしているか(キジ)、縦長か(サギ)。また止まり方では、ウグイスの仲間は体を水平にして止まり、キビタキなどヒタキの仲間は直立に止まります。飛んでいる時の翼の先の形(まっ直なヒヨドリ、まがっているムクドリ)や水鳥が水面に浮かんでいる時の体の胴の長さ、尾ばねの位置の違いなどに注意しましょう。

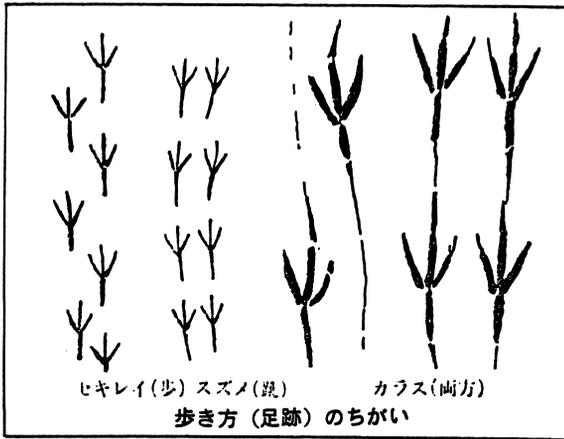
色彩 鳥にはたいてい翼や顔に特徴となる、斑紋や、線模様が入っています。シギやチドリの飛んでいる時の翼と尾の模様の組合せは特徴的です。

動作 よく観察してみると、動作にも特徴のある鳥がたくさんいることに気がきます。セキレイ類はよく尾を振ります。カモの飛び立ち方には、助走をつけるのと、その場から飛び立つのがあります。
飛び方 直線状に飛ぶ鳥、波状に飛ぶ鳥、波状でも浅いか、深いか。また、はばたきの速さや深さにも注意しましょう。

歩き方 片足を交互に出して歩くタイプ(サギ)、両足をそろえてピョンピョンはねるタイプ(スズメ)、両方得意な鳥(カラス)などもあります。

鳴き声 野鳥のきれいな声を聞くのはとても楽しい事です。これを覚えるには、鳴き声をなにか言葉で表わすのもよい方法です。これを聞きなしといいますが、例えば、サンコウチョウはツキヒホシ、ホイホイホイ、ホトトギスはテッペンカケタ





カと聞きなしができます。カッコーのように鳴き声が名前になった鳥もいます。囀りはレコードもたくさん出ているので聞いてみるとよいでしょう。しかし、囀りというのは繁殖期にしか聞けなくて1年の3分の2以上は地鳴きという、あまり特徴のない地味な鳴き声になってしまいます。地道に何回も聞きましょう。

環境 鳥を見に行く時、その場所の環境は、大切なことの一つです。日本には、野鳥が約500種類いますが、大体の鳥はすみ分けをしていて、いる場所が決まっています。だから、環境と鳥の結びつきを覚えると見分けやすくなります。

時期 鳥には、夏に繁殖のためにくるツバメなどの夏鳥や、越冬にくる冬鳥、いつもいる留鳥という違いがあり、時期によっている鳥といない鳥があります。例えば、ジョウビタキとキビタキは両方とも背中逆ハの字の模様が目立つ鳥ですが、ジョウビタキは冬鳥でキビタキは夏鳥です。そこで冬に背中に逆ハの字の模様のある鳥を見たということになれば、それはジョウビタキで、夏ならばキビタキだとすぐにわかります。

さて、以上のような事に注意しながら鳥を見たら、忘れないようにメモをとることを習慣にしましょう。特にわからない鳥が出てきた時には、よくその鳥を観察し、目についたものをなるべく詳しく記録しておく事が大切です。その場合、チェックリストを作っておくと便利です。また、記録のはじめには必ず、年月日を忘れないで書き入れるようにしましょう。

全国で普通に見られる鳥 表は全国100ヶ所で夏期冬期に調査した結果から、出会う回数が多い(=出現率が高い)、数が多い(=優占度が高い)種類を、それぞれ上位から10種ずつ並べたものです。

優×出とある列は、出会う回数も数も多い鳥を示しています。従って、繁殖期ならば、スズメ、ヒヨドリ、ホオジロ、ツバメ、ウグイス、キジバト、シジュウカラ、ハシボンガラス、ムクドリ、メジロの10種を知っていれば、日本の平均的な場所ならば、出会う鳥の%はわかるということになります。この10種に冬期はツグミ、カシラダカ、カワラヒワ、エナガ、モズを加えて、以上の15種類の鳥を覚えれば、夏、冬いつでも7割の鳥はわかるようになるでしょう。

生徒を指導する場合に、これらの鳥をまず最初におぼえてしまうことです。それにその地域の特徴種、例えば川があるならばセキレイ類やカワセミ、コサギといったものを加えたり、カモ類を加えたりしていけばよいでしょう。

◆夏期 上位 10 種◆

	優 占 度 (%)		出 現 率 (%)		優占度×出現率+100	
1	スズメ	20.8	ヒヨドリ	87.6	スズメ	13.1
2	ヒヨドリ	10.8	ホオジロ	76.5	ヒヨドリ	9.5
3	ホオジロ	7.5	キジバト	70.6	ホオジロ	5.7
4	ツバメ	7.3	ウグイス	65.4	ツバメ	4.3
5	ウグイス	5.5	スズメ	62.8	ウグイス	3.6
6	ムクドリ	4.7	ツバメ	58.2	キジバト	2.4
7	シジュウカラ	4.5	シジュウカラ	56.2	シジュウカラ	2.3
8	キジバト	3.4	ハシボンガラス	50.3	ハシボンガラス	1.4
9	メジロ	3.2	カワラヒワ	44.4	ムクドリ	1.3
10	ハシボンガラス	2.8	トビ	36.6	メジロ	1.2

合 計 75.0% (出現数 15407羽)

◆冬期 上位 10 種◆

	優 占 度 (%)		出 現 率 (%)		優占度×出現率+100	
1	スズメ	16.8	ヒヨドリ	85.4	スズメ	10.1
2	ヒヨドリ	8.6	ホオジロ	72.2	ヒヨドリ	7.3
3	ホオジロ	7.8	ツグミ	68.8	ホオジロ	5.6
4	ムクドリ	7.1	シジュウカラ	66.0	ツグミ	3.4
5	カシラダカ	6.3	キジバト	62.5	シジュウカラ	2.6
6	ツグミ	4.9	スズメ	60.4	カシラダカ	2.5
7	シジュウカラ	4.0	モズ	52.1	ムクドリ	2.4
8	カワラヒワ	3.7	ハシボンガラス	50.0	キジバト	1.9
9	エナガ	3.6	ウグイス	49.3	メジロ	1.6
10	メジロ	3.6	メジロ	45.8	カワラヒワ エナガ	1.5

合 計 66.4% (出現数 21752羽)

本校の愛鳥活動

神奈川県秦野市立本町小学校 栗田龍司先生

丹沢山地のふもとと秦野盆地のほぼ中央に建つ本町小学校は、児童数1301名の大規模校です。学区は商業地区で商店街を通学する児童が多く、校舎の南側には県道をはさんで水無川が流れています。最近、人口増加にともない、河川の汚濁がすすみあまり自然環境には恵まれていません。

1. 愛鳥活動のねらい

愛鳥活動を通じて、児童に3つのことを学ばせたい。

- 自然のしくみを知る。
- 人間の生活環境を知る。
- 自然保護の考え方と方法を知る。

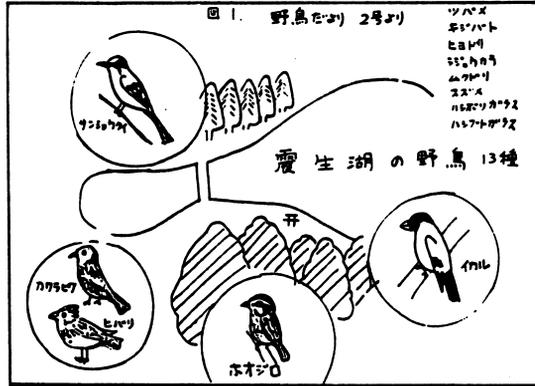
2. 活動の内容

理科教育の一環として愛鳥活動を取りあげ、自然に興味と関心を持たせ、自然愛護の精神と実践力を伸ばすことを目標に活動してきた。愛鳥活動の具体的な活動の柱として、3つの活動をすすめてきた。(昭和51~55年の活動)

- I. 野鳥に親しむ活動
- II. 野鳥を知る活動
- III. 野鳥を守る活動

I. 野鳥に親しむ活動

1. スライド作りと映写会
秦野盆地にみられる野鳥を紹介
2. 野鳥の本の紹介
図鑑、草原のことり、雪国のスズメなど
3. 野鳥のコーナー作り
巣箱、給餌台、野鳥説明板、実のなる木



4. 科学ニュース

給食時に愛鳥活動のようすを紹介。
自然観察カードによる情報交換。

5. 探鳥会

学校内、水無川、金目川、弘法山、葛葉川
事前に自作のスライドにより特徴をつかませる。4年生以上対象。学期に2回、グループにわけて指導。

6. 全校野鳥観察の日

年2回、6、12月

7. 野鳥だよりの発行

8. 学校の鳥を決める「シジュウカラ」

野鳥クラブが全児童によびかける。

9. 野鳥の絵展覧会

児童会。全児童が自分の好きな野鳥をかく。

10. 愛鳥資料展(バード・ウィーク)

児童会による野鳥の絵コンクール 愛鳥ポスター、自由研究、巣箱・給餌台、野鳥の写真

1981.5.24 6:00~6:30

環境と野鳥 水無川・金目川の野鳥

●留鳥 ○冬鳥 ◎漂鳥 △夏鳥 □旅鳥

番号	科名	野鳥名	分類	大倉嶺渡堰堤	滝沢キャンブ場下	平和橋	塚原橋	水無頼橋	富士見橋	本町中学校前入道橋
1	カラス	ハシブトガラス	●	2	4					
2		ハシボソガラス	●		2					2
3		オナガ	●		7			1		11
4		カケス	◎	3	1					
5	ムクドリ	ムクドリ	●		2	8	9	7	16	11
6	ハタオリドリ	スズメ	●	1	3	13	7	13	1	24
29	チドリ	イカルチドリ	●	1			1			
30	サギ	コサギ	●			1				
個体総数				21	50	43	25	51	29	89
種類数				11	17	9	7	10	7	9
環境指数				21	38	14	9	14	13	12
環境評価				C	A	C	D	C	C	C

の展示。一般にも公開。

11. 巣箱づくり・給餌台づくり

4年生以上の希望者、野鳥クラブ員。

12. 「秦野の野鳥」の作成。

5年間の資料をまとめる。

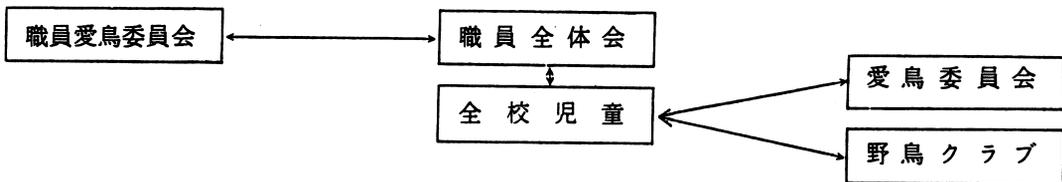
13. 紙しばい

野鳥クラブ員が、朝の自習時に、1年生にみせる。

II. 野鳥を知る活動

1. 学校内の四季の野鳥調査
2. 水無川(秦野橋～本町中)の四季の野鳥調査
3. 学区内、学区周辺の野鳥調査
4. ツバメ、コシアカツバメの巣の分布調査
5. 給餌台に集まる野鳥調査

3. 組織



6. 野鳥による環境調査 (水無川、市内河川)

7. 巣箱の利用調査

8. モズのハヤニエの調査

III. 野鳥を守る活動

1. 冬期の給餌活動 学校内(6ヶ所)、各家庭
2. 給水活動
3. 巣箱かけ 弘法山、震生湖
4. 実のなる木の植樹 児童会、卒業記念
5. 幼鳥、きずついた鳥の保護 ムクドリなど11種。
6. ヒマワリの種をうえて、カワラヒワをよぶ。
7. 母親探鳥クラブ・秦野野鳥の会
S53年、お母さん方の野鳥クラブ結成、卒業生と家族の会も。

4. 年間活動計画 昭和56年度

月	主 な 活 動 内 容
4	年間計画、環境調査、スライドを見る会
5	環境調査、探鳥会、野鳥だより、ツバメ、コシアカツバメの巣の分布
6	環境調査、探鳥会、野鳥だより、巣箱調査
7	環境調査、野鳥の絵展覧会
8	環境調査 (学区内及び学区周辺の野鳥)(市内河川の野鳥)、巣箱づくり、自由研究
9	環境調査、探鳥会、野鳥だより、自由研究発表会、スライドを見る会
10	環境調査、探鳥会、野鳥だより、給餌台づくり
11	環境調査、探鳥会、野鳥だより
12	環境調査、全校野鳥観察
1	環境調査、探鳥会、野鳥だより、お正月大会(野鳥カルタ)、給餌台に集まる野鳥
2	環境調査、探鳥会、野鳥だより、巣箱かけ、クラブ発表会
3	環境調査、実のなる木植樹、お別れ探鳥会、反省

5. 今後の課題

- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ①自然環境の変化と野鳥のつながり ②巣箱を利用する野鳥の調査 ③実のなる木に集まる野鳥の調査 ④野鳥の保護と緑化 | <ul style="list-style-type: none"> ⑤効果的な探鳥会 ⑥地域社会に愛鳥活動をどのように広げていったらよいか |
|---|--|

〔活動内容〕

全校的にとりくむ年間行事

A バード・ウィークに関連するとりくみ

展示	写真、絵、ポスター	1階「とりのえをかこう」 「ツバメの来た日」
	書きこみできる図表	2階「野鳥の鳴き声」 「校庭の巣箱」
	ひと口知識	3階「巣をみつけた所」

・放送-野鳥の声のレコード 「野鳥をみた所」
テレビ番組など

・事前観察会（補助者との打ち合せ）
野鳥観察会 学年ごとに観察、クラブ員は補助
・事前指導-全体で
・事後指導-ファイルへの記入、色ぬり、作文（学級）朝会でのまとめ。

B 台風と多摩川

・台風による多摩川や自然の変化を観察する。
・学年ごとに行動。
・野原での遊びを工夫し、その中から「〜」に気づくように広く多摩川の自然を探索する。

C 冬と野鳥（カモ中心）

・拝島堤防付近を中心に学年ごとに観察する。クラブ員をつける。

D その他の活動

・愛鳥クラブ
・遠足、野外活動（ゴミの持ち帰り）
・自然愛護にかかわるとりくみ
（植樹、巣箱の製作と修理、えさ台、自然愛護を

呼びかける立て札）

・観察カード作りと資料収集

E 学年のめあての野鳥（下表）

F 留意事項

・観察ノート（ファイルは各教室におく。）
・事前、事後指導に必要な資料や掲示物は、特活室に保管する。

・愛鳥作品コンクールへの出品
・物品の購入-プロミナ1台、双眼鏡、携帯判野鳥図鑑、資料ケース（カードネット）。

・飼育小屋の修理。

5.まとめと今後の課題

愛鳥活動の方法もいくつかの変せんを経て、学年のめあての野鳥の観察を6年間積み重ねていくこととなった。この積み重ねから、それぞれの野鳥の習性の違いや、自然環境と野鳥とのかかわりが、無理なく考えられ、理解を深めやすくなったように思う。また、指導者の学級担任にとっても、学年の鳥名と観察上の手だてをもっていれば、子どもとともに学べる気楽さも利点である。

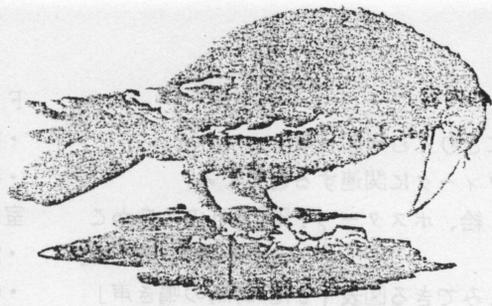
問題点としては、理科生物教材の野鳥による作物被害の未然防除の対策である。被害にあってからでは、野鳥に対する愛情もそがれる心配を生じる。

本校の活動組織からの課題は、各教科、道徳、特別活動、ゆとりの時間（学級裁量分）などに愛鳥活動に関連させた年間指導計画を示していないことである。このことは「3・活動」で述べた固定化されない独自の発想を生かした指導への強みであると裏腹に教材研究の収集と充実をはかる必要がある。

昭和54年度（1979）学年のめあての鳥決定
昭和55年度（1980）カモを全学年に入れる
昭和56年度（1981）3年キセキレイをヒヨドリに変える

季節 学年	春		冬	
1	スズメ（ハタオリドリ科） ※ニューナイスズメ	ツバメ（ツバメ科） ※イワツバメ、アマツバメ	カモ（ガンカモ科） （カモの識別）	コサギ（サギ科）
2	ヒバリ（ヒバリ科）	ムクドリ（ムクドリ科） ※コムクドリ	カモ （ " ）	カラス（カラス科） ※ハシブトガラス、ハシボソガラス、オナガ、カケス
3	セグロセキレイ（セキレイ科） ※キセキレイ、ハクセキレイ、タヒバリ	ヒヨドリ（ヒヨドリ科）	カモ （カモの大小）	ユリカモメ（カモメ科） ※ウミネコ、コアジサシ
4	ササゴイ（サギ科） ※コサギ、チュウサギ、ダイサギ、アオサギ、ゴイサギ	オナガ（カラス科）	カモ （ " ）	カイツブリ（カイツブリ科）
5	セッカ（ヒタキ科） ※ウグイス、オオヨシキリ	キジバト（ハト科）	カモ （種類・名称）	イソシギ（シギ科） ※キアシシギ、クサシギ
6	ホオジロ（ホオジロ科） ※コジュリン、アオジ	カワラヒワ（アトリ科） ※アトリシメ、マヒワ、イカル	カモ （ " ）	イカルチドリ（チドリ科） ※コチドリ、シロチドリ

意見交換会から



1. カラスも精一杯生きているんだ。

「学校の近くに森があって、そこにカラスがいる。生物クラブの子どもと観察をしたいのだが、どうしたらよいか分からない。えさを与えようとしたのだが……。」

自己紹介のあと、このカラスの観察の話から次のような話へと発展していった。

- ① カラスも精一杯生きている。姿、形などで、人間が勝手に差別をしていないか。
- ② 「愛鳥」という言葉が気になる。人間サイドだ。
- ③ 鳥を知識の面だけでとらえているこわさ。

2. 愛鳥モデル校になったが。

愛鳥モデル校に指定され、いろいろ、活動してきたが、学校ぐるみになりにくい。内外、いろいろな面で非協力的。指導者、後継者の問題など。

3. 「いいなあ。きれいだなあ」

子どもたちに何をどう取り組ませるか、ということについて。

野鳥を見て「いいなあ、かわいいなあ」と感じればそれでいいのではないか。なぜ、記録をとったり、観察したりする必要があるのか、という意見もあった。

4. まとめて

以上、話し合われたことのいくつかを紹介したが、すべて、子どもたちに愛鳥という窓口を通して、自然にどうふれさせ、どう考えさせていくのかということだと思う。

まず、地域の実態に応じ、あるがままの自然を

くり返し、直接見させることから始まる。直接自然を見ることにより、そのきびしさ、美しさ、はかなさを感じ得るようになる。

ヒナが巣立つ頃、ヘビがヒナを飲みこむ。子ども達はヘビを憎む。そしていつでもヘビはきらわれる。どこにでもよく見られる光景である。

これを「自然である」とすぐ考えて分かるような子どもはいない。しかし、こういう経験を通し、ヘビも野鳥もヒトも、自然の中の一つである、と考えられる子どもに育てていきたい。

「いいなあ、きれいだなあ」という気持ちは、子どもたちの活動のもとになるもので、大切にしないではいけないものだと思う。しかし、そこにとどまっていたら、創造や発展はあり得ない。子どもの感じたものを大切に、そこから、基本的な内容をさぐり、それをくり返していくことにより、新しい発見や、考えが生まれてくるはずである。

愛鳥教育は、この基本的なことを互いに学びあい、実践し、記録し、子どもに事実にもとづき、自分で考え判断する姿勢を養っていくものだと思う。

今、価値感の多様化が、さかんに言いはやされている。このようなとき、それに流されることなく、自分の信念にもとづき、自分の力量に応じてまた、地域や子どもの実態に応じて、階段を登るように、一つ一つ活動を進めることが、愛鳥教育、モデル校、その指導者にとって大切なことである。

(梅本)



初めて参加しました

「鳥を見に行く会があるんだけど、どう？」主人の友だちから電話がありました。主人は一も二もなく、「行く、行く。」そばでみていた私も「行く。」

当日、御岳山とはどんな所かと興味深々。でもケーブルカー下の坂に怖れをなし、この山の上で食事できるのかな、とケーブルカーが、まるで天と地をつなぐはしごのように思えました。そして、やっと会場へ着いたら、なんと「愛鳥教育研究会会場」ギョッとしました。だって私は単に探鳥会のようなものだと思っていたので、何の心がまえも実践もないのですもの。その上、約束してあった主人の友だちもなかなかこないし、いよいよ心細くなって「会場がちがうんじゃない。」とか何とか言っているうちに始まってしまいました。

講師の先生のスライドを使ってのお話で、少々予備知識もできましたが、スズメとひよどりと……両手の指があれば十分なほどしか鳥を知らない私ですから、ただ美しい鳥の写真にみとれていました。

夜の意見交換会では、私の学校で敵視されているカラスについて意見を伺い、平和共存をはかるべきかな、それなら今の、あるがままが良いのかなと思いました。保護が過保護になり干渉になってはいけません。

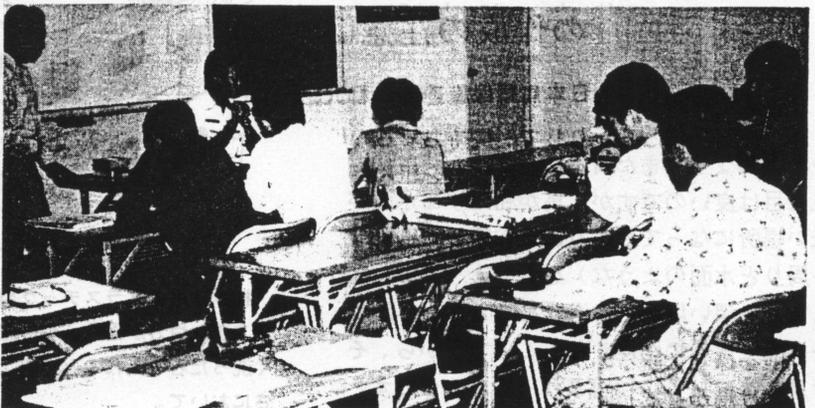
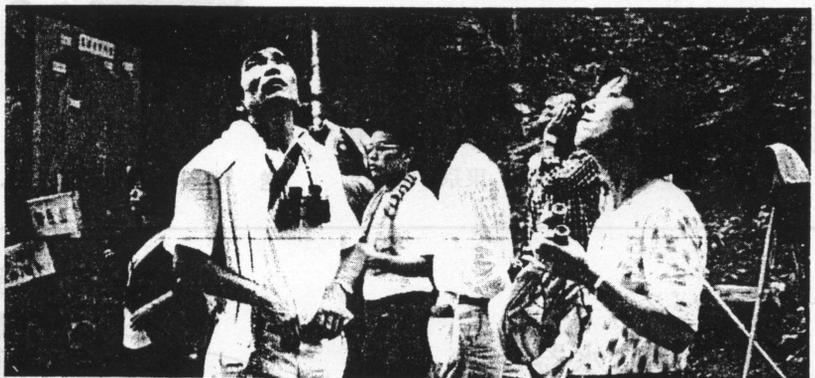
次の朝は探鳥会。眠い目をこすりながら、まだ暗いうちに出発。鳥の声に耳をかたむけようと目をつむったら、ウトウトしそうでしたが、次々ときこえてくる声、みえる姿にこちらの目もパッチリ。でも鳥をききわかるなんてまだまだ、ただただ先生の説明に感心。そのうち地鳴りのような音。ヤマドリの羽ばたきの音です。ようやく目をこらすと、その姿までみえました。コルリが道に出てきたり、アオバトがみえたり。この日は二十数

種の鳥がみられたとか。私はそのうちのいくつかをものにしたかな、と考えました。ロックガーデンの苔むす溪流を散策し、まだ現われるかもしれない鳥に心を残して宿舎へ。朝食がおいしかった。

それからは研究発表でした。鳥類愛護を入口として、自然を大切にすることを育てようという努力は並大抵のものではないと感心しました。夜の意見交換会で、中学の先生から、生徒を探鳥会につれていっても条件が悪いと、感動どころか文句ばかりで、目的などどこかへ行ってしまうという意見が出ましたが、多くの子どもにみられる態度ではないでしょうか。それは、多くの子どもたちが大人に管理された中で生活しているからではないかと思います。旅行でもキャンプでも、便利にデラックスになっているし、スポーツだって大人がついてまわっているのが現状でしょう。ついには遊びの場でさえ、子どもを管理しようとしています。そんな中で、自然な形で子どもたちに、この自然の恵みを感じさせるにはどうすればよいのでしょうか。これからの研究会に期待しています。

家に帰ってきて、スズメやツバメにあつたら、まるで家族にあつたようで、ほっとしました。

(町田市立原小学校・千葉 芙美恵)



◆ お知らせ ◆

〔講演・映画の会〕

「トリが来る」

映画・話・クイズのつどい

11月7日(土) 午後1時30分より

広島 場所 中国新聞社ホール

12月5日(土) 午後1時30分より

福岡 場所 西日本新聞社国際ホール

映画「国鳥キジ」「逃げた小鳥は今」ほか、NHK自然のアルバムの中坪礼治氏やWWF日本委員会副会長古賀忠道氏の講演を予定。お近くの方、おさそいあわせの上、どうぞご参加下さい。入場無料。主催は(財)日本鳥類保護連盟と中国新聞社、西日本新聞社です。

〔研究発表大会〕

全国鳥獣保護実績発表大会 が 開かれます

愛鳥モデル校の全国大会ともいえる実績発表大会が開かれます。小・中・団体の部に分かれて、日ごろの愛鳥活動の実際を発表しあいます。この中には当研究会の会員校もあります。会員の皆様には、大変に参考になると思いますので、どうぞお出かけ下さい。参加は無料です。

なお、11月21日(出)には、鳥獣保護に関する意見交換会が開かれます。これも参加は自由です。

主催 環境庁・(財)日本鳥類保護連盟

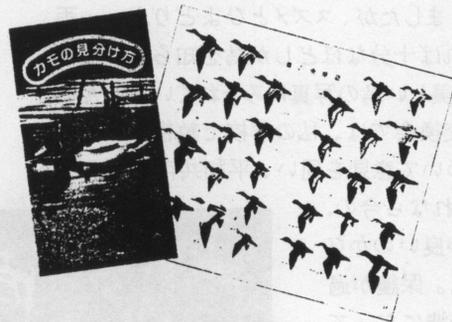
日時 昭和56年11月20日(金)午前10時より

場所 両日ともまだ未定です。決まり次第、会員の方には、ハガキでお知らせいたします。

カモの見分け方 100円(送料別)

「カモはどれも識別しにくい。特にメスはどうもね」とおっしゃる方、カモだけの識別の小冊子ができました。日本で記録されたカモ、36種を取り上げ、それぞれの静止形、飛翔形(背面と腹面)を図示し、わかりにくいメスは、見開きで一目で比較できるようまとめてあります。次々とカモが渡ってきている今、ぜひ一冊どうぞ。

申込先 〒150 渋谷区南平台町8-20 日本鳥類保護連盟 振替番号 東京5-19214



送料 1冊70円、2冊170円、3-7冊200円、8-14冊250円

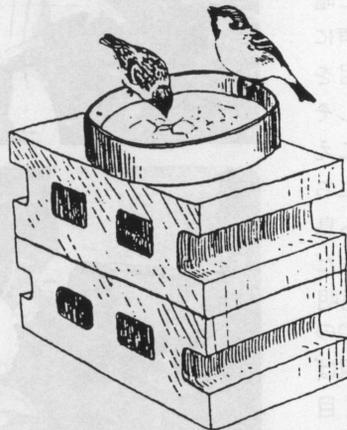
バード・バス

(野鳥用給水器)

の作成の注意(2)

日本鳥類保護連盟 柳沢紀夫

材料 一番しっかりして、長持ちするのはコンクリートでしょう。また周りに石を組んだりするのも見た目は良いのですが、鳥が利用する水面が一段低い場所になってしまうような印象(例えばプール周りや水面のような)をもつようにはしないことです。深い場所で水浴することは、外敵の危険を感知できるのが遅くなることですから、それだけ鳥が警戒して、利用されにくいからです。



植木鉢用のプラスチック製の皿も即席の水場に利用できます。目方が軽く、やや深いのが欠点ですが、中によく洗った石を入れると立派な水場になります。適当な高さにおいて。

そうしたことから、地面よりも水面が上にあると、利用されやすいのです。

このほかに、樽や桶に石や砂を入れて浅くしたものや、タイヤを輪切りにしたもの、地面を浅く掘ってビニールシートを張ったものなど、いろいろ考えられます。しかし私の経験からいうと“水鉢”などの人工的なものよりも、“つくばい”のように自然な材料に水をためるようにしたものの方がよく利用されるようです。

置き場所 巣箱や給餌台もそうなのですが、木の茂った中や、藪の中に設けても利用されにくいのです。それは、そのような場所は外敵にとって都合のよい場所になるからです。

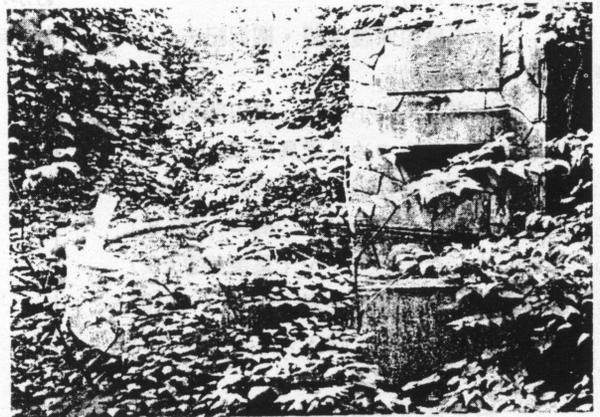
木や藪から2～5mくらい離れ、周囲がひらけた場所で、しかも水面が地面よりも上にあるような場所にあったら、出来上ったその日から、鳥は利用することでしょう。それに水が動いているともっと効果が大きくなり、鳥はよく利用します。流すとか、給水器の上の方から水を一滴づつ落とすとか、工夫されるとよいでしょう。

こうしたものの設置の作業は、生徒たちにも参加させ、工夫させることが大切です。自分が作った、自分が手伝って出来たそれに野鳥が来、水浴

しているのを見る楽しさ、嬉しさは、それは大切にしたいものだからです。

また、水浴場の周辺は、人が入らないようにしておく、鳥が来やすいので、皆で相談してきめておくといいでしょう。

すでにある池などを利用して、小鳥を呼ぼうという場合は、池の中に水面すれすれまで頭を出すような石を置くとか、板切れを浮かべるとか、斜めに枝をつきたてるとか、そこに鳥が止まれるように工夫すべきです。しかし水浴させるのは、むずかしいことが多いようです。飲むだけならこれでよいのですが。



納入先 〒150 東京都渋谷区南平台町8-20
(財)日本鳥類保護連盟 内

愛鳥教育研究会

砂浴 ところで、小鳥の中には体温の調節や身体を清潔に保つのに水浴ではなく、砂浴をするものがあります。ニワトリが行うのはよく知っているでしょう。ニワトリに近い仲間、キジとかヤマドリ、ライチョウ、コジュケイなどはよく行いますし、スズメがやります。キジやコジュケイ、スズメのために、乾いたやわらかい土の場所や乾いた

砂を用意してやるとよいでしょう。

ところでスズメは水浴も砂浴もやります。どちらか一方をやる鳥が大部分ですから、この点では、スズメはとても珍しい鳥なのです。

(図は日本鳥類保護連盟・「庭に小鳥を」より)

第 5 号 目 次

- 夏季研修会を終了して…常務理事・下田澄子(1)
第5回研究会報告
講演「野鳥の見分け方」
日本鳥類保護連盟・柳沢紀夫(1)
発表「本校の愛鳥活動」
秦野市立本町小学校・栗田龍司(4)
「地域の自然をみつめる愛鳥指導」
福生市立福生第五小学校・栗原 仁(6)
意見交換会から……………梅本 登(8)
初めて参加しました……………千葉美美恵(9)
お知らせ・全国鳥獣保護実績発表大会…………(10)
「トリが来る」映画・話・クイズのつどい
バード・バス作成の注意(2)
日本鳥類保護連盟・柳沢紀夫(10)

編集後記 8月の研究会から、はやくも1ヶ月以上たってしまいました。発表下さった、栗原先生栗田先生、本当にありがとうございました。また、会場のビジターセンター、宿所のうつぼやさんのおかげで楽しい研究会が開けました。あわせて、お礼申し上げます。

愛鳥教育 No.5

1981年10月1日
愛鳥教育研究会 発行

〒150 東京都渋谷区南平台町8-20
(財)日本鳥類保護連盟 内
TEL 03-461-0540
振替 東京2-92041

(きりとり線)

入 会 申 込 書

愛鳥教育研究会の趣旨に賛同し、会費二千円を添えて、入会いたします。

年 月 日

申込者 個人 団体 (○をつけて下さい)

氏名

Ⓜ

住所

電話

申込者の所属、職業

勤務先の住所、名称

電話